

地域の手でJA機能を代替 住民自主運営の百貨店が地域の生活拠点に！

旧町が進めてきた「人づくり運動」の発展で、農業協同組合支所撤退後の施設を住民出資により、商業、コミュニティ拠点として運営。生活物資や娯楽商品など約3,000品目の商品を扱うほか、地元で収穫された農産物・加工品も販売。さらにクリーニング業や高齢者への商品宅配サービスも行。また、季節ごとに特徴的なイベントを開催し、住民主体の「楽しい」地域づくりを展開している。



背景と課題

人づくりから地域活性化を目指す

合併により京丹後市となった旧大宮町は、京都府の北西にあって、丹後半島の玄関口に位置し、盆地と山地で形成され、古代の丹後の国として、遺跡、古墳が多い町である一方、人口減少や農林業の後継者不足といった問題を抱えていた。

昭和60年代、全国的に一村一品運動が展開した際に、旧大宮町は人材育成を掲げ、商工会・町が「はばたく若者の会＝JOY」を設立、まちづくりを担うリーダーの育成を行っていた。

こうした人材育成を機に、町は高い意識を備えた人材を地域に還元し、地域づくりの実践へと踏み出すこととなった。町内全地区に「村づくり委員会」の組織化を呼びかけ、この常吉地区はいち早く委員会が組織化されていき、「できることから、みんなで楽しく」をスローガンに取組を進めてきた。



取組のきっかけ

農協支所の撤退を逆手に

こうした取組を通して地区にまとまりと自信がよみがえっていった中、合併にあわせ旧大宮町常吉地区では、JA支所が廃止されることとなった。

地域のコミュニティ機能や利便性を担ってきた地区の生活拠点であり、また地域の農業や暮らしを活性化させたいという地域住民の思いも受け、当時大宮町の「村づくり委員会」に関わってきた地域リーダーの大木満和氏らが中心となって「村営百貨店構想」が地域に提案された。この構想がきっかけとなり、「常吉村の村民が暮らしやすく、楽しく生きていくための活性基地」をコンセプトとし、JAの機能を地域で代替し農業と暮らしの総合センターとなる「(有)常吉村営百貨店」が、平成9年、地域住民33人、計350万円の出資により設立された。



有限会社
常吉村営百貨店

所在地：〒629-2533

京都府京丹後市大宮町

上常吉123-2

連絡先：0772-68-1819

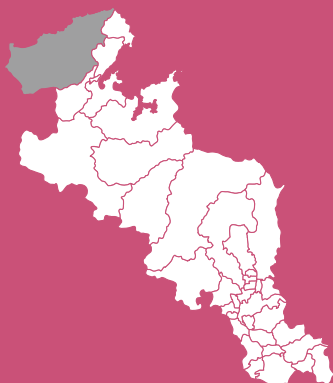
京都府京丹後市

総人口：62,919人

高齢化率：28.6%

世帯数：21,986世帯

総面積：501.84 km²





取組と成果

「村づくり」の視点で百貨店づくりに取り組む

取組 1

お菓子から地元農産物まで多様な品揃え

店舗で販売している商品は、一般食品や菓子、日用雑貨、お土産から地元でとれた米や野菜、果物などの農作物、さらに肥料や農作業用品などの農業関連品、日常生活に必要な生活雑貨品、加工食品などが所狭しと並び、住民の生活を支えている。



取組 2

各種便利サービス

商品の販売に加え、コピー・ファックスサービス、宅急便の取り扱い、クリーニング、写真の現像、一人暮らしのお年寄り宅への配達や法事用弁当の手配、農作業の人的支援業務や地域の情報発信など、山間地域に不足しがちなあらゆるサービスを担っており、地域を支える百貨店として機能している。

取組 3

地区出身者への呼びかけ

毎年盆前に、地区を離れた若者に「夏祭りをやるから帰っておいで」と手紙（ふるさと帰ってこいコール）を出している。

取組 4

特産品及び常吉ブランドの開発

常吉地区では、村の老人会と提携して、特産物の開発に取り組んでいる。特に「エゴマ」に力を入れており、無農薬で育てられたエゴマは「エゴマもろみ」や油などに加工し、近隣の商店で売られ、常吉特産品の主力商品として期待されている。

また、純粋に常吉の豊かな自然の中で育った省農薬の野菜やお米だけに付けられる品質保証として「ピュア常吉」というブランドを確立し、地場産物のブランド化・販売促進に取り組んでいる。

取組 5

様々なイベント・交流活動の開催

春はプロの演奏者を招いたジャズコンサート、夏は村の「オッチャン」が先生となって太極拳や英語、裏山でのきのこ勉強等を指導する寺子屋塾、秋は農家が育てたカボチャの大きさを競うパンプキンフェスティバルといったイベントを開催している。

平成21年度からは常吉村の農業や文化を体験する交流プログラムを実施する計画を立てており、そのためのモニターツアーを平成20年度に3回開催した。



成果

20件を超える視察

常吉村百貨店の多岐にわたる取組は、過疎化が進む中山間地域における先進的モデルとなっている。そのため全国各地から年に20件を超える視察が訪れるようになり、多くの地域のモデルとして貢献している。

体験ツアーの手ごたえ

平成20年度に実施した体験交流のモニターツアーでは子どもから大人まで述べ38名が参加した。参加者のほとんどがツアーに対して良い印象を示しており、平成21年度からの体験講習ツアー実施に対して期待が膨らむ。

お年寄りの生きがいづくりと若者の農業意識向上

出荷者は地区の人なら誰でも出荷できるようにして、野菜を持ち込むお年寄りには生きがいと収入が生まれている。また若者の農業に対する意識も変わり、家の農業に関わる若者も増えつつある。